

人間即自然

源氏物語宇治十帖より

四年 駒 嶺 高 幸

(一)序

源氏物語、そう聞くが早い。「あはれ」だと人は言う。何が「あはれ」なものか、と、宇治十帖にまで「あはれ」を持ち込むのには、いささか抵抗を感じる。

何故に、とおおむ返しにたずねられそうであるが、それなら答えよう、「黒い霧が晴れないから」と。つまり、価値ある文章ほど内包するものが豊富だと聞く。それは表面に現われるものだけに追従する弊害から逃れようとするものだ。平安朝の文学であるから、修辭的には何ら取るに足らぬものしか無いのであろうか。当時の文章は写真にのみ陥つていたのであろうか。決してそうとは思えないのである。万葉の時代から自然は尊ばれて来た、否、畏敬の念をさえ持つて迎えられたのである。その自然が、象徴的意味を携えて登場するのが、宇治十帖なのであり、ここに高い象徴的文章を見出すのである。

実際、宇治十帖における自然の果す役割は如何なるも

のがあるか。人間の、つまりは人事と自然の織りなす美を、人間と自然との果す役割を通して、ここにみつめようとするものである。

勿論これは、外山英策氏の「源氏物語の自然描写と自然」で、源氏物語の自然描写は単なる自然として捉えようとされ、「若し源氏物語より自然描写を全く除き去らば、醜悪なる枕檜と何ぞ選ばん。」(二四頁)と述べられるところとは反論を試みなければならぬであらうし森岡常夫博士の「源氏物語の研究」で論じられる「源氏物語に於ける自然の役割は、その世界を浄化し、深化し、具象化し、印象化し、或は象徴化して無限の詩趣を与へることであつた。源氏物語の抒情的精神は、その自然を度外視して考へることはできない。蓋し平安時代の生活風雅は、自然との深い接触に於いて実現されたのであるから、源氏物語がそれを反映してゐるのは当然であらう

と思ふ。」と述べられることに關しては、それをより具體的な考察を加えようとするものである。

要するに、従来の「あはれ」のみをこすき回すのを一時中止して、その背後にあるもの、(どちらが背後にあるのか分らないが)に焦点を当ててみたいと思うのである。

(二) 宇治の自然

源氏物語で取り扱われる自然は、宮中、二条院その他貴族の庭園等の平安京の小自然が中心である。ところが、宇治十帖に至つては、荒々しい大自然が展開されるのである。宇治十帖の舞台は、当然宇治であることは言うまでもないが、その外に小野もその一部を担うと見て良いであろう。

自然というのは、厳密にいうなら人工的でなく、人間の関与しない一切のものを意味するのであろうが、……では一般的に自然の風物、自然の風景というような用法に従うものである。

外山英策氏の「源氏物語の自然描写と庭園」によると、宇治十帖にはあまりふれておられないが、「我が国が山

紫水明であることは、甚だしく愛国心を涵養して、人々は敵愾心に強く、勇猛果敢で、自然を崇拜愛好し、文学芸術宗教を尊重せしために、遂に独得のものを生み出した。源氏物語は其の代表的作品といへる。」(二頁)とある。それでは本文に従つて、その自然描写に關しての論述を試みる前に、多少觀念的には思われるが、窪田空穂博士が「平安朝文芸の精神」において、「平安朝の自然は、人間と對立的な關係の物ではなく、人間生活の中に取り入れられ、融合してゐるもので、人事と自然とは分ち難い状態で扱はれてゐるのが風であるから、この自然觀を、人生觀と緊密に關係したものと見るのは、誤りではないと思へる。」(一三二頁)と述べられるところに注目するならば、次章に抄出する自然描写の持つ意義が何であるかが、比較的容易に理解できるであろう。

(三) 宇治の四季

塵俗を離れて、閑静を楽しむ精神は、仏教思想により、あるいは老莊思想の支持するところである。日本文学においては、古く万葉集や懷風藻に存する事は周知の如くであろう。しかも、源氏物語宇治十帖における閑散たる

人里離れた宇治の寂しい自然を主要な背景としている事實もまた、見逃されなれぬと思ふ。

それでは、次に本文から、宇治十帖の中でも、特に宇治の自然の自然描写の部分の部分を抄出し、それらを四季に分類してみよう。

春の描写

(イ)遙々と霞み渡れる空に、散る桜あれば今開け初むるなど、いろいろ見渡さるゝに、河ぞひ柳の起き伏し靡く水影など、疎かならずをかしきを、見慣らひ給はぬ人は、いと珍らしく見捨て難しと思さる。(岩波文庫四・椎本二五三頁) 以下同じ

(ロ)年更りぬれば、空の気色麗かなるに、汀の氷解け渡るに付けても、斯うまで存へけるも有り難くもと、眺め給ふ。聖の坊より、「雪消えに摘みて待るなり」とて、沢の芹、峰の蕨など牽りたり。(四椎本二七二)

(ハ)二月の朔日頃とあれば、程近くなる儘に、花の木どもの気色ばむも、残りゆかしく、峰の霞の立つを見棄てむ事も、己が常世にてだにあらぬ旅寝にて、如何にはしたなく人笑はれなる事もこそなど、万づに慎ましく、心一つに思ひ明し暮し給ふ。(五早蕨三)

(ニ)御前近き紅梅の、色も香も懐しきに、鶯だに見過しがたげに打鳴きて渡るぬれば、まして、「春や昔の」と、心を感はし給ふどちの御物語に、折哀れなりかし。風のさと吹き入るゝに、花の香も客人の御匂も、橋ならねど、昔思ひ出でらるゝ種なり。(五早蕨六五)

(ホ)山の方は霞隔てゝ、寒き洲崎に立てる鶺鴒の姿も、処がらはいとをかしろ見ゆるに、宇治橋の遙々と見渡さるゝに、柴積船の所々に行き違ひたるなど、(五浮舟一八九)

(ヘ)雪の降り積れるに、我が住む方を見遣り給へば、霞の絶え絶えに梢ばかり見ゆ。山は鐘を懸けたるやうに、きらきらと夕日に輝きたるに、(五浮舟一九四)

(ト)降り乱れ汀に氷る雪よりも
中空にてぞ我は消ぬべき (五浮舟一九四)

夏の描写

(イ)その年常よりも暑さを人々佗ぶるに、河面涼しからむはやと思ひ出でて、俄に参りて給へり。朝涼みの程に出で給ひけれど、生憎にさし来る日影眩くて、宮のおはせし西の廂に、宿直人召し出でておはす。

(四椎本七四)

秋の描写

(イ)花紅葉、水の流れにも、心を遣る便りに寄せて、いとどしくながめ給ふより外の事なし。(四橋姫二三二)

二)

(ロ)峰の朝霧晴るゝ折なくて、明し暮し給ふに、この宇治山に聖だちたる阿闍梨住みけり。(四橋姫二三三)

(ハ)秋の末つ方、四季に当てつゝし給ふ御念仏を、この河面は、網代の浪も、この頃はいとど耳聾しく静かならぬをとて。(四橋姫二三六)

(ニ)入り持て行くまゝに、霧の塞がりて、道も見えぬ繁木の中を分け給ふに、いと荒ましき風のきほひに、ほろほろと落ち乱るゝ木の葉の露の散りかかるも、いと冷やかに、人遣りならずいたく濡れ給ひぬ。

(四橋姫二三六)

(ホ)山嵐に堪へぬ木の葉の露よりも

あやなく脆き我が涙かな(四橋姫二三六)

(ヘ)霧晴れゆかば、はしたなかるべき髪れを、面なく御覧じ咎められぬべき様なれば、思ひ給ふる心の程よりは、口惜しうなむ」とて立ち給ふに、かのおはします寺の鐘の声、幽かに聞えて、霧いと深く立渡れり。峰の八重雲思ひ遣る隔て多く哀れなるに、(四橋姫二四二)

橋姫二四二)

(ト)「朝ぼらけ家路も見えず尋ね来し槇の尾山は霧籠めてけり

心細くも侍るけるかな」(四橋姫二四二)

(チ)うちも微睡まず、河風のいと荒ましきに、木の葉の散り交ふ水の響など、哀れも過ぎて、物怖ろしく心細き所の様なり。(五橋姫二四六)

(リ)八月二十日の程なりけり、大方の空の気色もいとどしき頃、君達は、朝夕霧の晴るゝ間もなく、思し歎きつゝながめ給ふ。有明の月のいと花やかにさし出でて、水の面もさやかに澄みたるを、其方の薙上げせて、見出し給へるに、鐘の声幽かに響きて、明けぬなりと聞ゆる程に、(四椎本二六一)

(ヌ)明けぬ夜の心地ながら、九月にもなりぬ。野山の気色、まして袖の時雨を催しがちに、とりもすれば争ひ落つる木の葉の音も、水の響も、涙の滝も、一つ物の様に昏れ惑ひて、(四椎本二六二)

(ル)秋の夜の気はひは、斯からぬ所だに、自ら哀れ多かるを、まして峰の嵐も籬の虫も、心細げにのみ聞き渡さる。(五総角一一)

(ヲ)明くなりゆき、村鳥の立ちさまよふ羽風近う聞ゆ。

夜深き朝の鐘の音微かに響く。(五総角一二)

(ウ)秋の気色も知らず顔に、青き枝の、片枝はいと濃く

紅葉したるを、

同じ枝を分き染めける山姫に

何れか深き色と問はばや (五総角二一)

(カ) 九月十日の程なれば、野山の景色も思ひ遣らるゝに、
時雨めきて搔昏らし、空の村雲怖ろしげなる夕暮、

(五総角三四)

(ク) 黄昏時のいみじく心細げなるに、雨冷やかに打濺ぎ
て、秋果つる気色の凄きに、打しめり濡れ給へる句
どもは、世の物に似ず艶にて、 (五総角三四)

(ク) 御簾掛け交へ、此処彼処搔き払ひ、岩隠れに積れる
紅葉の朽葉少し晴け、遣水の水草払はせなどぞし給
ふ。由ある真物、着など、然るべき人なども奉れ給
へり。 (五総角三七)

(ク) 夕暮の空の気色いと凄く時雨れて、木の下吹き払ふ

風の音など、譬へむ方なく、 (五総角四五)

(ク) 九月二十日余日ばかりにおはしたり。いとゞしく風
のみ吹き払ひて、心滾う荒ましげなる水の音のみ宿
守にて、人影も殊に見えず。 (五宿木一一〇)

(ツ) 木枯の堪へ難きまで吹き通したるに、残る梢もなく
散り敷きたる紅葉を、踏み分けける跡も見えぬを、
見渡して、暎にもえ出で給はず。いと気色ある深山
木に、宿りたる鶯の色ぞまだ残りたる。 (五宿木一

一四)

(ネ) 袖の重なりながら、長やかに出てたりけるが、川霧
に濡れて、御衣の紅なるに、御直衣の花の、おどろ
おどろしう移りたるを、落懸の高き所に見つけて、
引入れ給ふ。 (五東屋一六七)

冬の描写

(一) 網代の気はひ近く、耳聾しき川の辺にて、 (四橋姫
二二二)

(ロ) 「網代は人騒がしげなり。されど氷魚も寄らぬにや
あらむ、すさまじげなる気色なり」と、御供の人々
見知りて言ふ。怪しき船共に柴刈り積み、各ら何と
なき世の営みどもに、行き交ふ様どもの、果敢なき
水の上に浮びたる、誰も思へば同如なる世の常無さ
なり。 (四橋姫二四三)

(ハ) 霰降る深山の里は朝夕に

眺むる空も搔昏らしつゝ (五総角四七)

(ニ) 霜冴ゆる汀の千鳥うち憶びて

鳴く音悲しき朝ぼらけかな (五総角五〇)

(ホ) 風いたう吹きて、雪の降る様慌しう荒れ惑ふ。京
はいと斯うしもあらしかと人遣りならず心細うて、
疎くて止みぬべきにやと、思ふ契りは辛けれど、恨

むべうもあらず、懐かしうらうたげなる御もてなしを、唯暫しにても例の様にまして、思ひつる事も語らばばやと、思ひ続けて眺め給ふ。光もなくて暮れ果てぬ。(五)総角五一(二)

(六)搔曇り日影も見えぬ奥山に

心を昏す頃にもあるかな(五)総角五二)

(ト)雪の搔昏らし降る日、終日に眺め暮して、世の中のすさまじき事にいふなる十二月の月夜の、曇なくさし出でたるを、簾巻き上げて見給へば、向ひの寺の鐘の聲、枕を敷てて、「今日も暮れぬ」と幽かなるを聞きて、

後れじと空行く月を慕ふかな

終に住むべきこの世をらねば

風のいと烈しければ、部下させ給ふに、四方の山の鐘と見ゆる汀の氷、月影たいと面白し。(五)総角五

五)

(チ)まだ夜深き程の雪の気はひいと寒げなるに、人々声数多して、馬の音聞ゆ。何人かは、斯るさ夜中に雪を分くべきと、大徳達も驚き思へるに、宮、狩の御衣にいたう寝れて、濡れ濡れ入り給ふなりけり。

(五)総角五六)

(リ)年の暮方には、斯からぬ所だに、空の気色例には似

ぬを、荒れぬ日なく降り積む雪に、打眺めつつ明し暮し給ふ心地、尽きせず夢のやうなり。(五)総角五八)

(四)人間即自然(結論)

流石に広く面白き宮の、池山などの気色ばかり昔に変わらでいたう荒れ増るを、つれづれと眺め給ふ。家司なども、むねむねしき人無かりければ、取繕ふ人も無きままに、草青やかに繁り、軒の忍草ぞ所え顔に青み渡れる。(四)橋姫二二九)

荒れてゆく庭の寂しさは、やがて八宮御一家の御境地に通ずるものであるが、その内に焼失したので、宇治の山荘に移られた。そこは、「いとど山重なれる御住処」(四)橋姫二二三)で波風の音が激しく、これを聞く姫君達は、女らしいなよなよしたところが乏しいだろうと思われる程であつた。

さてここで、先程四季に分類した宇治の、自然に關しての考察を試みると、

秋(二)、(チ)においては、庭園の風物とは異つて、婁じ

心細さが感じられる。

秋(四)、(三)、(一)は、霧の深々と立ちこめた、奥深い、寂しい世界である。殊に八宮薺去の折に、秋(四)に現われてゐる霧は、悲愁極まりない人々の、心の象徴であらう。

更に宇治は雪が深い。特に大君他界の辺には雪景色が、ところどころに見られる。例えば、冬(六)のように、雪に埋もれた一色の世界である。

冬(七)は、春(一)(句宮と浮舟との邂逅の背景である)と共に、冷えさびた世界を示している。これらは光源氏の世界に現われたる冬の描写(朝顔の巻の雪まろがしの風雅など)とは相反して、鋭くときざまされた刃物のような、冷酷な寒さである。

このように宇治の自然は、嵐、川波、霧、霜、雪そして雨などによつて代表される。雨の描写は多くないのであるが、秋(九)、(四)、(一)等が上げられよう。そしてこれらには、寂しさに耐えられない人間の心の一面が隠されてゐる。それは、枯淡な幽玄とも言うべきものである。

このような山里の自然描写について、森岡氏は「源氏物語の研究」(八九頁)において、「筋の展開に変化を与える上からも必要であつたに相違ないのであるが、然し作品が多量の関心を有していることも否定できないのである。ここで作者の態度は、人々の心を抑圧する物憂

い自然を愛玩するのでもなく、それを融合してゐるとは言へない。崇高やさびの美を認めない程積極的ではないが、あはれという語では評し難い程、悲しい人々の心境や運命を調和する自然として、是認してゐるのである。外面の感覚性に乏しいだけに、却つて心に深く響き合ふものがあると思ふ。」と述べておられるが、これは傾聴に価しよう。

秋(四)、(七)、冬(六)、(三)、(一)、これらは宇治の自然を背景とする歌である。源氏物語に見られる和歌は、自然をおり込んでゐるものが多いのであるが、その中には技巧を最高にこらした新古今朝をも超越した淡さの表現が漂つてゐる、とまではいかにせよ、中世的世界の「あはれ」にも似た生命が感じられる。それは決して和歌ならず地の文においても見られる所であり、窪田博士が「平安朝文芸の精神」で述べられる。「源氏物語には、やゝ迎へる心をもつて見れば、幽玄その物として説いてゐるのではないが、質としては幽玄とは異ならない自然観の、その孕まずにはゐられない心的態度を説いてゐるのである」(一三三)という事に帰するのであらうと思う。勿論、その外に、村井順氏も、「『古今和歌集序』と源氏物語」(源氏物語評論)において、紫式部は、紀貫之を偶像視したのであるが、それは、古今集の撰進や序によ

つてである。従つてこの序も、源氏物語の作者に大きな影響を与えた筈である。しかし源氏物語の方が、序よりも一歩進歩し複雑化している所がある。というような事を述べられているによつてもである。

源氏物語における自然の取り入れ方には、種々の場合がある。物語の自然が、人事から離されないのは当然であるが、厳密に自然描写と言えそうなのは、源氏物語全編を通じても少なく、宇治十帖においては確定的でない。冬(天)、秋(天)などは、自然と人間とが更に深い関係において結合している例であり、秋(天)においては、薫香というようない覚的なものが、自然によつて引き立てられている。

ところで、源氏物語において最も重大な意味を有すると思われる自然と人々の心情との結合の見られるのは、宇治ではなく小野の里である。その部分の抄出は、省略するが、ここに至つて小野の浮舟は、遣水の螢によつて昔を思い出して、慰安としている。これはある自然の風物風景が媒介となつて、過去の経験をよみがえらせることになつてゐる。

更に、景情一致に至つては、自然人事を合わせ述べたり、やがて自然の姿がそのまま人間の心の反影となる。

秋(天)は、宿命に翻弄される八宮御一家の環境として調

和する。

秋(天)、冬(天)等は、朝夕、霧の晴れる間もない、あるいは雪に埋れた宇治のいぶせさは、そのまま大君や中君の心を反影したものであろう。

ともかく、源氏物語においては、深い愛情により対象の自然に順応し、人間世界を詩化している所に特色があり、それは自然と人間との固く結合された調和であると考えられよう。

森岡博士は、「源氏物語の自然」(源氏物語の研究所収)において、「秋の人としては、秋好、夕霧、薫等がある」その理由としては、「宇治の世界の薫に至ると、のしめやかな空気は徹底してゐるのである。即ち彼はさながら秋そのものの如く寂しき人である。宇治の秋は、六条院の秋や更に小野の秋とも趣を異にする。薫は『入りもて行くままに、霧りふたがりて、道も見えぬ繁木の中をわけ』るのであるが、この深い霧は、彼の心の象徴とも見られよう。又『荒ましき水の音波の響き』も、宿命の影と絡み合つて、鋭く人に迫るように思はれる。ここには優艶の趣は認められぬ。かやうな薫をめぐる秋が、宇治の世界の基調をなしてゐるのである。(中略)源氏から、夕霧を経て薫に及ぶと、かやうに秋の心に徹してゐるのは、紫式部の境地の展開を示すものと思はれ

る」と論述されるが、秋はむしろ大君であろう。秋は人々の逝去、又はその思い出の背景として時々用いられるのもわかるように、晩秋の自然にも秋夕のすぐ後に見えている船遊びの様な華やかさも無くはないが、本質は「しめやかな寂しさ」であろう。秋(り)などがその例としてあげられる。その外、春は紫の上であり、中の君であろうし、夏は花散里であり、匂宮があげられる。冬は明石上となろうが、この事については後で述べることにして、季節感、自然を越えて、行事、衣服、調度、飲食物等人間生活に広範に浸潤しているが、これらについてはここでは言及の範囲でない。

さて、前述の通り、宇治の自然を四季に求めてその部分进行分类してみたのであつたが、それにより、夏と冬の描写の少ないのに気づくはずである(春も少ないが、これは自然以外のもので表わされている)。これは如何なる理由からであろうか。窪田空穂博士は「平安朝文芸の精神」において、権の巻の冬の月を例に引きながら、「四季を批評するといへば、従来は春と秋だけで、夏と冬とは問題ともされてゐない。京都といふ土地にあつては、夏は暑く、冬は寒くて、どちらも暮しにくい季節である。美観をぞといふものは感じている余裕もなく、たとひ感じて、春や秋には較ぶべくもないものであらう。

(中略) 作者は、花紅葉の艶と面白さに対立させて、新たに捉へ来た冬の月に、何を捉へてゐるのかといふと、それはさみしさと哀れである。(中略) 従来は、艶のみが美であるかのように思はれてゐた世界に、作者は、艶にまさるものとして哀れを捉へ、四季の趣は、客観的よりは主観的にありとし、そしてその具象として、花紅葉の代りに冬の月を讀んでゐるのである」と述べられ、更に、「源氏物語は、花紅葉が始まつたのであるが、そこに止どまることが出来ず、古人がするまじき例としてゐる冬の月に、哀れさを捉へて、そこに安住しようとするやうになつたのである。そしてその心が、この自然観に反映してゐるのであらうと思はれる。」(一三三)と述べられてゐるが、これは四季そのものを人間に当てはめて考えた、前述あるいは後述のことに対して、風物を通して冬の意義を認めてゐることに、共通性があつた。一つには大君の死により、秋の次に来る冬を象徴させているのではあるまいか、普通は死の描写は、秋のそれによつて代表されるようである。しかしながら、宇治十帖における大君の死、それは清純な、道心を有する処女の死であつた。余りにも悲愴であり、冷酷である。そんな中に冬の厳しい自然という季節感を持ち込むならば、彼女の死の痛ましさは如実に表現されよう。

更に、蕪の性格であるが、氷の如く冷やかなとまではいかなくとも、何とも暗い人生を歩むその姿には、薄暗い雪の降りしきる真冬の感じがしてならない。春がすぐ来ようとしても、まだまだ先が長いのである。

それならば夏の描写はどうなるのであろうか、当然真夏の強烈な太陽の光が魅力なのであるが、それがために迷惑するものも少なくはない。そこに浮び上る人物は句宮であろう。彼の性格にともなう行動は、蕪のそれと相反し、全くと言って良い程対照的であるという事からである。真夏の草木を焦す程の太陽、それは誰が欲したものであろうか、現代人が避暑するが如くには句宮の周辺の人々は、彼の情熱から逃れる事はできなかつた。否、できなかつたのではなく、むしろしなかつたのであるが、それはあたかも植物が水と太陽とを欲するように、蕪と句宮とを欲した人、浮舟が存在したのである。その、か弱い女性浮舟も、植物の成長に不可欠な水と太陽の一方を失おうとした時は既に、この世の人ではあり得なかつた。それがかなわないと知つた時に、万物の本源にかえらうと思ひ、出家したのである。これは結局、登場人物が四季のあるいは自然の役割を演じている、「人間即自然」なのである。貴族時ローマン精神がうかがわれるのも、このような、仏教的思想の漂う所から来ているのであ

らう。浮舟の身分の低さを、自殺とからませて云々するのも道理には合うが、もう一步突つ込んだ、人間を自然の一部として考え、源氏物語以前の文学、日本書紀、古事記、さては万葉集に現われる「人間の叫び」ともいへば「自然の理」を訴えて、浮舟を世に送つたものではあるまいか。平安貴族、特に女性にあつては、何で露骨な表現をもつて自己の意見（思想）となし得よう。

前にも紹介したように、窪田空穂博士の述べられる冬の美の「あはれ」に固執することなく、源氏物語の自然描写は、自然そのままの姿を写實的に表現しているところに特色があるのでなく、情趣又は情感的なもの（岡博士は、これを、「多くの風物を統一する気分」と表現される）により、自然を捉えることであつたのである。そのことは秋(又)が実証すべきものと言えらると思う。